

農 学 図 書 館

三 橋 時 雄

もう6年ほど前になるであろうか。東京大学の農学部図書館を館長の古島さんに案内してもらって見学したことがある。その時の偽らない卒直な感じは京都にもこんなのがあればという羨しさであった。ヨーロッパやアメリカの立派な図書館を見ても、先進国なんだからという一種の諦めのようなものがあって、羨しい気持はしてもそれほど切実なものではなかった。ところが身近かな東大の農学部中央図書館と別にこのような素晴らしい専門図書館があるのを眼のあたりにはしては、心も動かざるを得なかったというわけである。

入口のロッカー、閲覧室の指定書コーナー、参考書コーナー、雑誌展示棚、それに複写室、マイクロリーダー・プリンター、新聞雑誌閲覧室はもちろん、他にグループ・スタディ・ルーム、個室、会議室およびゼミナール室、計算室もある。相当数の個席をもった開架式の書庫内には農業経済学科図書室にあった図書も収蔵されているので、自然科学系図書のほかに人文社会科学の図書も豊富で、中央図書館の機能を一部代替する感じであった。もちろん、それとともに専門図書館として、農学部で受け入れている主要な雑誌の新着号目次を印刷して希望者に速報したり、農学部図書館にない文献でも必要な時には他の図書館から借り出したり、複写のサービスもするし、文献が国内にない場合には海外への照会も引き受け、農学関係の研究活動にできるだけ役立つとしていた。

京都大学の農学部も今では農学科、林学科、農芸化学科、農林生物学科、農業工学科、農林経済学科、水産学科、林産工学科、食品工学科の9学科となり、舞鶴にあった水産学教室も京都に移転してくることとなり、これに農場、演習林、農業簿記研究施設、農業研究施設を加えると、正に隔世の感がある大きな規模のものとなった。

農学部創設時からあった農学部図書室は棚橋初太郎先生以来、関係者のご努力により乏しい予算の中でこれまでよくその役割を果たしてきたものであるが、今やこの拡大された農学部の図書室としては相応しくないものになりつつある。したがって今ではこれを発展的に解消して比較的新しくできた諸学科の要求にも応えうる新時代の農学部図書館を早急に設置する必要がある。

しかもその場合、たんに京都大学の農学部だけのものとしてでなく、すでに近畿地区農学系図書館懇談会もできていることであるから、少くとも近畿7大学農学系図書館の相互協力活動のセンターとしての機能も十分に果たしうるものを造るべきである。

農業博物館やドイツのゲッティンゲン大学にあるフィルム研究所のようなものを京都に造ってほしいと願っているわたしではあるが、それと同時に、いやその前にまず今の農学部図書室と農学部各学科の図書を母体として、新しい時代の農学の内容に合致した近代的な農学図書館が京大の北部構内に中央図書館の分館として、しかも農学文献センターとしての機能も果たしうるようなものとして、一日も早く実現するようにと希望するものである。

(農学部教授)